心理学ミュージアム

法政大学文学部心理学科 教授
吉村浩一

Profile―よしむら　ひろかず
京都大学大学院教育学研究科教育方法学専攻博士課程満期退学。京都大学教養部助手，金沢大学文学部講師，助教授，明星大学人文学部教授を経て，2003年より現職。専門は知覚・認知心理学。著書は『運動現象のタキソノミー』，『逆さめがねの左右学』（いずれもナカニシヤ出版）。

オーソリティ・レコードとしての製品カタログ

YAMAKOSHI・TOKYO

V 記　憶

No. 1001　ランシュブルグ氏記憶検査器
Rainschburg's Memory Apparatus

機械的記憶の實驗、及び記憶力の檢査に用ふ。

本器の特徴は、演出器よりの刺戟が連續的に演出されることである。刺戟を圓形板に裁斷板に記してあり、器械の側轉板に取付け、回轉を与へ、電氣仕掛で廻轉して、其度の演出器から順次に刺戟を提示する。回轉は 60 の刺戟を書き得る。演出器は、板は 12 ヶ、高さは 34 乃至 36 糎の間を自在に變化せしめ得る。本器の用途は極めて廣く、本器は点線圖畫、ミヤーリ氏測驗、ダレーヂマン氏測驗等と連結され、刺戟の間隔を正確に、且つ自動的に刺戟を提供することが出來る。

電動刺戟裝置からなる記憶檢査器（圖第 1 ）は、手動にて刺戟を演出し得る、極めて簡便なものである。圖中、A 視力、C 恐怖、D 刺戟恐及び刺戟。

ランシュブルグ氏記憶檢査器

KY改案記憶檢査器

No. 1001(A)　No. 1001(B)

No. 1002　ヴィルト氏記憶檢査器
Wirth's Memory Apparatus

記憶の實驗、及び記憶力の檢査に用ふ。

本器の特徴は電動中全く喧騒を發しないこと、及び小分間が添加されて、ゼンマイの代用をして

— 30 —

YAMAKOSHI・TOKYO

ることである。器は厚板（ヤ）の地上の其時機裝置の上を廻轉する。電動盤の廻轉（イ）は、電動の廻轉によつて交互に車軸の間を分なる。かくて車軸は順次廻轉する。車軸の廻轉は二本の長い電圧棒に振られた棒の上にあたり、少しづつ動くことによつて、刺戟間隔を調整する。刺戟は圓形板（ロ）は、板の面は車軸に取付られて、徐々に一周切つの刺戟する。先端（ハ）は刺戟が正しく動つてゐるやうな中心標となる。圓形は電動裝置機器の前面に從つて、少しづつ刺戟間に廻進し、前々の刺戟は順に演出される。刺戟演出時間は電動機器の分調整することによつて、檢査の長さに變化し得る。全體の機構は電氣によつて統はれ、從つ刺戟は々刺戟があらはれるやうになつてゐる。

No. 1003　カード 積 出 器
Card Changer

記憶の實驗の際に用ひる刺戟カードを順次提出する器械である。

演出器は發條の働きによつて回轉する。レバー（イ）、は間隔板に作用して、これを動べると、カードを順次變化せしめる。

— 31 —

写真１　山越工作所の『実験心理学器械目録』初版（1931 年）の一部

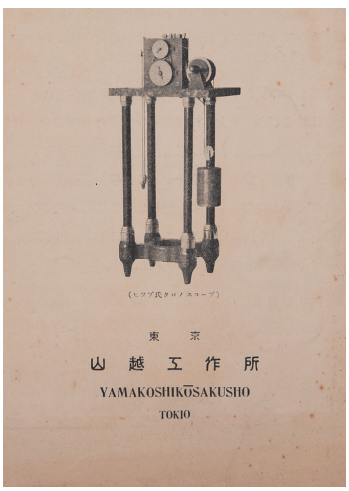

写真２　写真１の初版より前に作成された『実験心理学器械目録』（1927 年）の表紙

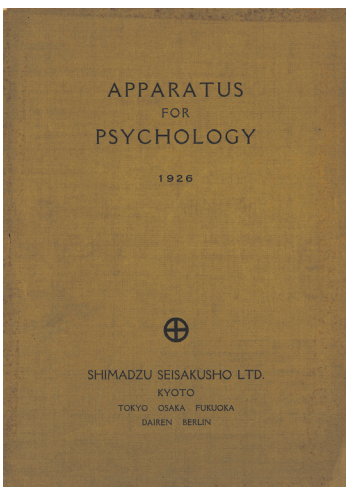

写真３　島津製作所の『心理学実験器械目録』（1926 年作成）の表紙

心理学の古い実験機器を目の前にしたとき，まず思うことは，「この装置ってどう使うのだろう」との疑問でしょう。実は，心理学の古典的実験機器といわれる装置類を「懐かしい」と思う研究者は，今やもういないのです。リタイアされたご存命の先生方にとっても，ほとんどがまったく使ったことのないものだからです。生き証人がいない以上，どう使っていたのかを知るには，文献に頼らざるを得ません。

役に立つ文献として思い当たるのは，古い装置を紹介した書籍類です。論文だと1論文に1機種しか登場しないことがほとんどですが，書籍には1冊で当時使われていた機器類を網羅的に解説しているものがあります。何冊かを紹介しましょう。

まず，個人著ではなく公的性格の強い書籍として，明治43年（1910）に東京帝国大学文科大学心理学教室が編集し弘道館から発行された『実験心理写真帖』があります。これは，同心理学教室で行われていた実験のさまざまを，用いられた機器類の使い方を中心に説明した本です。装置をつけて測定を行っている様子の写真を掲げ，37種類の実験が解説されています。

それより遅れること1年，個人著では大槻快尊（おおつきかいそん）が明治44年（1911）に著した『実験心理学』（成美堂）があります。大槻は当時，東京帝国大学文科大学心理学教室助手，学部を卒業して5年にしての力作です。元良勇次郎と松本亦太郎という当時の東大と京大の心理学教授が序文を寄せた千ページ超えの大作です。実験機器を中心に300枚近い図が載せられており，これ1冊で当時の実験装置の使用法がわかります。快尊という名前から察せられるように，大槻は真言宗の僧侶で，後に学究生活から離れることになります。明治時代の実験機器の図と使い方は，これら2書によりおおよそ知ることができます。

大正時代に使われていた実験機器類を理解するには，久保良英（くぼりょうえい）が大正末から昭和初頭にかけて著した『実験心理学精義』（中文館書店）の『簡単なる行動編』（1925）と『複雑なる行動編』（1927）が役立ちます。データを示した図などもかなり含まれていますが，2巻合わせて478枚の図は，さながら当時までの実験装置の辞書のようです。

実はここまでは前置きで，ここからが本題です。昭和になると，実験心理学を行う大学が急速に増え，全貌を描くことなど誰にもできなくなります。そこで目をつけたいのが，実験機器を製作していた会社の製品カタログです。とは言え，戦前にそうしたカタログが充実していたとはとても思えず，戦後も1970年，80年代からの竹井機器工業のカタログを待たなければならないと思っていました。ところが，今はもうありませんが戦後までその名を知られていた山越工作所が，昭和8年に『実験心理学生理学器械目録　改訂第二版』（1933年）という写真入りのカタログを作っていたのです。それを見つけたのは，国会図書館のデジタルコレクションです。古典書とは言えない廃業した会社の製品カタログが研究室に居ながらにして閲覧できたことは驚きでした（実は前置きで紹介した3書も国会図書館のデジタルコレクションに入っています）。しかも120ページにも及ぶ大部のカタログで，そこには山越が製造・販売していた心理学関連機器の図・価格・縮尺，それに使用法の説明がつけられています。製品化された実験機器を購入した研究者は，さまざまに工夫して特殊な使い方をしているかもしれません。それに対し，製造した会社のカタログに掲載されている使用法は，いわば使い方のオーソリティ・レコードと言えます。そうであるなら，使い方のわからない機器類の標準的な使い方を，カタログを通して知るのはうまい手です。前号でも紹介したウェブページ「実験心理学ミュージアム」では，日本で心理学実験機器類を作ってきた各社のカタログ・データをアーカイブする作業を進めています。

ここに紹介する3枚の写真は，古い実験機器を調査している中で見つけた貴重なカタログです。写真1は山越工作所のカタログで，上述の国会図書館に残されている改訂第二版の2年前に作られた初版の一部です（タイトルは『実験心理学器械目録』で改訂第二版と少し違っています）。写真2は，初版よりさらに前の同名タイトルの山越カタログの表紙です。「Catalogue No. 32」となっていますが，それより若い番号のカタログはおそらく心理学以外の領域のものだったと思われます。写真3は，さらにそれより古い昭和元年に島津製作所が作った心理学実験機器カタログの表紙です。これは島津製作所創業記念資料館にも残っていません。これらはすべて，関西学院大学が大切に残してくれているものです。